

供給せんとするも、其遂行は甚だ困難のこと多かりし。水道が生活上米穀以上の必需品なるは今更言ふ迄もなく而も消火唯一の材料なるを思へば其豊富にして完備せる装置を要望するは予が言論を俟つ迄もない。市民は今次の辛き経験にて震災も恐しかりしも、更に恐しかりしは震災其物でなく、之より起つた火災であつたことを、奥々も牢記して帝都百年の長計には水利上深き計畫がなくてはならぬ。

左様に豊富にして完備せる水道装置を完成したる上にて、必要と認むる建築物に對しては、一朝火あるときは極めて容易に、可成は自動的に消火水を噴注すべき装置を設備すべきである。依て改造東京市設備の第一として考ふべきは理想的完全なる水道の設備であらねばならぬ。

公園の都市に於ける必要は恰も人體の肺に比すべく市民の衛生生活上缺くべからざるは、亦言ふ迄もない。東京市が文明都市として公園の規模設備共に餘りに貧弱で、市面積の三%にも及ばざるは他の都市に見難き程である。曩に都市計畫の聲明せらるるや、有志同人は庭園協會なる標榜の下に、公園の必要を宣傳するに汲々たりし。予亦大正八年以降卑見を發表して大

に市民に期する所があつたが、市民は未だ大に耳を籍すに至らざる折柄、今回の震災火災に遭つた。而して芝、日比谷、上野、淺草諸公園は言ふに及ばず、小公園又は準公園、類公園と見るべき廣場、空地、廣路等が如何に安全地帯として利用せられたるかを思へば、有志の口に筆に千百の宣傳にも優る現實の必要を示された譯である。公園の機能は非常時の避難所のみにあらざるは勿論なれども此一事は明に且確かに都市設計上公園が如何に大切なるものであるかを證明した。仍て予は今其他の效用を説くを止めて、市民及び當事者の深き注意を促進し置くのみである。

菜肉市場と云ふ中、東京市の問題となるのは魚市場である。之に就ては十數年來の宿題として揉み盡した形である。從來の魚河岸居寄り、中洲移轉、芝浦埋立地移轉、中々に決し兼て此震災時まで持越した。而して各方面の主張は部分的小區域の小利害、小便否が争點となつて居るの觀があつて、市たる大有機體を起點としての論は餘り多くない。上述數ヶ所の候補地孰れも大優點もなく、大缺點もない大同小異の物ではあるまいか。甚小の利害得喪を争ふよりも、更に大に考ふべき事があると思ふ。災前までの魚市場は極めて不完全

にして市場として殆んど見るべき設備なき結果、衛生上誠に恐るべきものがあつた。即ち帝都二百餘萬の市民の主要なる營養物として食膳に上さるる魚類に、日常完全にチフス、赤痢杯の病毒を含まぬと云ふ保證が出来てあつたか、思へば寒心に堪へざるものがあつた。更に虎列刺に至ては如何、連年若くは二、三年毎に帝都を覬覦する同病は多くは海洋船舶に侵入の途を取るよりして其都度魚市場業者の狼狽は固より、遂に營業上の打撃、經濟上の損失となり一方需用者たる市民の不便、苦痛甚大なるものがあつた。實に近來コレラの流行に對して魚市場は其咽喉に位置するものと云ふ

べく、其豫防設備の完否は全市民の衛生上に大關係を有するにあらずや。斯く年々歳々此苦痛、此損失を経返して區々の小利害に拘泥して遑巡決せず、延引亦延引遂に覺醒せざりしは如何。予は此改造期に於て當事者宜しく敢然として決し、完全なる市場の建設に協力せられんことを希望せねばならぬ。

都市改造に就て衛生上の要望は決して以上に盡きの汚物塵芥の處置、火葬場、墓地の配置構造等數ふるに堪へざるも、今は上記要項のみに止める。敢て東京市民と言はず、國を舉げて、今や前代未聞の天警に覺醒して、大に奮起せられんことを切望する。(完)

鎌倉にて命を拾ひ東京にて産を失ふの記

醫學博士 遠 山 椿 吉

九月一日の大震災には、予は鎌倉にて此災害に遭つた。予の寓居は長谷の海岸近き新宿にて、昨年六月竣工した木造瓦葺の平家であつた。此日は妻女と、十四歳の末女千枝子と、一人の家婢と四人のうち、千枝子は下痢症で臥して居た。正午近き頃(十一時五十八分

とは後で知つたのである) 卒然當ならぬ大震動を感じた、思はず立て椽先に向つたが、妻女が最先に、次に予、次に千枝子と共に無意識に庭に飛び降りた……實は投げ出された様な感じであつた……同時に全く平伏してしまつた。

此時予等は危険より逃れんが爲め、壹尺でも、壹寸でも、家屋より遠ざからんと焦つたが、奇なることに平伏したまゝ、身體の自由を失つて、立つ事は固より、這ふことも出来ぬ、臂を張つて上軀を支へんとしても夫れも協はぬ、總身全く不隨に陥つたのである。之に反して感覺は緊張して鋭敏に働いて居つた様である。

椽先より突落されたのは感じ計りでない、全く突落されたのであつたことは、多くの人々も同様であつたことを後で聞いた。尙ほ其證據には某家の椽先きに寝かしてあつた幼児が、震動と同時に高く擲げ揚げられて、稍向ふの庭先に放ふり出されたといふのは、駈け出したのでない事は勿論、傾斜の爲めに轉り落ちたのと違つて、全く放振り出されたのである。

又運動不能となつたのは、卒然の恐怖、驚駭の際に精神的ショックより起る所謂「腰をぬかす」とは全く別物で、彼の如く複雑な現象ではなく、單純な機械學的のものであると思ふ。即ち地面搖動の結果重心が攪亂される爲めである。

吾々の筋肉運動は、支點重點の關係で運動が出来るのに、今は支點が固定されない、運動の成功しない譯

家の人々も爰に集つた。先づ驚いたのは、地面が恐ろしく割れてゐる、尺角程の御影石の門柱がニツ三ツに折れてゐる、又爰がいつになく變に明るいのには氣が付いて見廻すと、明るいのも道理、周囲の家々は一つも立つてゐるものがなく悉く打ちひしげてゐる。

此時予は始めて我に還つた様な氣分で、さても酷い揺れである、自分は之で一先づ壓死は免れ、一命は取り止めたが、此分では鎌倉一體に家屋の損害計りもなく、恐ろしく人體にも多分の被害があることだらふ杯、頭の中に閃めいた。急卒に其邊にある板の頬を持ち出し、地割の上に敷き渡して腰を押し、婢に命じて、下駄と烏打帽を取り寄せ、ホツと一息する間もあらず、表の方で「海嘯だ、逃げる」といふ聲が響いた。地震が始つてから、之まで恐ろしく十分時計りもあつた様である。此聲を聞くや予は咄嗟に家族に向つて「大佛へ行くんだ」と號令した。之は大佛。境内は此最寄で何事にも最も安全な地域と思つてをつたのと、一行が途中で離散する處があると思つたからである。此刹那予は思つた、自分は今辛じて地震には逃れたが、海嘯とあれば一帯一と呑みにされる筈だ、病後の自分に、病中の少女、他も婦女子、今度は恐ろしく免れぬ。然し空く天命

である。從來屢々經驗する中位の地震でも、歩行が蹣跚となるのや、荒波の時に船中の歩行に骨の折れるのや、遊戯の浮遊木を渡るのの難義なのも同一の理屈である。更に他の實驗によれば、地震が始まると同時に、飛ぶ鳥が俄かに飛行不完全となつたのを目撃したものがあつた、又恰度水泳中であつたものが、忽ち運動困難を感じたといふのも、重心の搖動の爲とすれば皆説明が付く。予等の場合は夫れの極端に、強度に現はれたに過ぎない、尤も斯様な非常の場合であるから、同時に幾分か精神的運動不能も混合して現はれたかもしれない。

かくて四人一團となつて地上に蕩搔き、蠢めきつ、懸命の努力で、數分時を費して庭先の垣根の方へ進むこと三尺計り、見れば家が激しく右に左にゆすぶられ、障子のガラスはばら／＼と音して碎け散り、紙障子は一と小間毎に残らず斜に裂け、やがて戸障子はし折れて外づれる、吊つてある電燈は盛んに振られて天井を撃つて碎ける、其震動と物音とは物凄くものであつた。

其うちに震動が少く穩かになつて、手足の自由がドツツやらきく様になつたので、足を踏みしめ／＼門の潜りを排き、家主の廣庭に出た。家主の家人と隣家の日

を俟つ時でない、緊張一番、直ぐ大佛道へ向つた。

此時背後の海の方でゴーツといふ海のうなりが聞えて居る。さて大佛へと急いでも狭い往來に潰れた家屋、崩れた石垣又は倒れた樹木や、電柱が折り重なり、處々地が裂け、橋は落ち、電線はもつれて居る、歩行の困難は言ふ計りない。新宿と大佛との間で殊に障害の大きかつたのはM大旅館の倒潰であつた、加之、我も々々と逃げ迷ふ人々で、押しつ押しされつ進むのである。見れば衣服の裂けたもの、髪が亂れた者は素よりの事、人の殆んどすべてが泥はおるか血の痕のないものはない、呼ぶ、叫ぶ、泣く、混亂のさまは名状し難い。逃げ出す際下枝子は病中ながら流石は若もの、威勢よく立ち上つて眞先に駆け出し、アラユル障害物を乗り越へ、踏み越へ、忽ちにして人込の中へ消えて仕舞つた。後れて進むた吾々は、大佛門前半丁計りの處に、左より鎌倉病院、右より某旅館の重なり倒れて、山の如く道を塞いで到底越へ難く、無止右手の裏路を行き、大佛の裏面より入らうとしたが、コ、には山崩れが大木と共に途を塞いでゐる。愈々究して右手の小高き別荘……後とて聞けば森村氏の別荘であつた……の門内に闖入した。茲にも段々人数が多くなつた。少し落付

くにつれて離散した女兒の事が氣になり出した。儘かに先發したから海嘯には襲はれまい。然し病中の衰弱で途中で倒れはせぬか、そして人々に踏まはせぬか、左なくとも我々の姿が見えぬ心細さに泣き出しはせぬかと、溜りかねて下婢を派して探さしたが、之も暫く遠つて来ない。トカクするうちに、火がM大旅館から起つた……此火は長谷方面の火元となつて四方へ擴がつた……我々は數分前同處を踏み越へて爰に來た、若しも多少し後れたならば、間一髪實に危なかつた杯思ふうちに、火は附近にも迫つて、烟が渦巻いてきて居溜らなくなつた。今度こそは前の山崩と後ろの火とで現實に挟まれて、危険の藪中に這入つたのである。絶對絶命、一刻も猶豫ならず何處にか逃路を見出ねばならぬ、立上つて二三の人々と山崩の際まで進み、左側の小溝の細丸太の一本橋を互に相扶けて渡り了せて、人家の裏門に着いた。先に進んだ人々が大聲を揚げて門を開かんことを乞ふも、故意か不在か、應ずるものがない。破るには餘りに頑丈である。無止引返して次の裏門に同法を試みた、幸に門は開いた、勢を得て突入し、茲を通り抜けて一目散に大佛の門前に入つて、山門脇の竹藪に多人數の避難者を見出し、茲にて女兒

と家婢及隣の家人杯に遭遇した。此處は確かに地震にも海嘯にも安全地帯であることを知つて、一先づ安堵したが、地震は寸時も止む時なくユラ／＼と連続し、火事も時々烟を吹き掛けて來るのであつた。

大佛境内に入つて周圍の光景を見て、第一に氣の附いた事は、山門前にある鎌倉病院の倒潰して多數の壓死者……患者、附添人、看護婦にて十一名なりしは數時間の後には判つた……あり、今や院員を擧げて患者の搬出最中である、其間に病院の茲に持ち出されたと知れる避難者は追々と負傷者を運んで來て救を乞ふ、彼等はやで混雜を極めてゐる、院長岡本學士は東京に在つて茲に居らぬ、院の幹部に知己多き予、加之も今自家一身は先以て危険線外に立つた予は傍觀するに忍びない、只だ病後の身で周旋活動は覺束ないが、幹部に加つて世話をやき出した、數時間の後地震も緩かになり、火事も下火になつた。而して幾分か心も落付て、少しく考へる事が出来る餘裕も出て來た。

◆ 海岸の寓居を出て此處まで逃げ延びる間、距離は僅々六七丁に過ぎぬ。時を費やすこと約二時間、右往左往、進んでは退き、退いては又進み萬障を排しての歩

行は一步でも蹉跌又は徒勞すまいと、細密な注意と滿身の努力をしたことと思ふ。それでこそ予は病後氣力減耗の身、少女は病中疲勞の身を以て、自分ながら敏捷であつたごおもふ程に、能く危難から脱出したのである。之れは恐怖と勇奮の爲めに絶頂まで緊張した精神作用に鞭撻せられてマキシムに發揮された運動である。世間で云ふ「非常時には平生に數倍する非常の力が出る」とは此事である。之は生理的の理解ではあるが、予等が危難を逃れた大原因は決して之ではない、全く機運であつたことが判つた。

海嘯は予が寓居を越へ、更に半丁許進んで來て、長谷停留場のレールを乗り越へたことは、此レール附近で某貴族の少女が溺れて、それを病院で手當を加へたときに知つた。予が寓居は此中間にあつたけれども、位皿が稍々高かつた爲めに、水は床下まで疊を濡すに至らなかつた。

海嘯の實況は跡にて能く判つたのであるが、地震が始つた時より海水は沖遠く迄引去つた、やがて十五、六分も過ぎたとおもふ時萬里の長城の様な大波が押し寄せて來た、當路の觀測報告によれば由井ヶ濱のは三十尺の高徑であつたこの事である。濱邊に目立つた大

建物は二軒の大旅館と、代議士W氏の別荘との三軒であつたが、何れも海嘯に一掃されて形を失つた。其内のW氏別荘には此日主人が予の知人K氏と鳥鷲戰中地震に逢ひ、K氏は五、六町隔つた自家の別荘に駆け歸れば、家族の一人潰屋に壓死しをるを見、救を乞はんが爲め前のW氏方に引返したるに、恰も海嘯の引き去つた後に、數分前のW氏宅は全く影を見なかつたとの事である。之にて海嘯の程度が判る。海嘯の最大なる親玉は只だ一つであつたらしい。尤も其後小さい波は往返數回あつた事も、此波に弄ばれて助かつた人の話で判つたのである。

予等がこんな危険の中で免かれたのは、全く機運であつたといふのは、機運はいつも時か場處の關係である。予の場合には初めは場處の關係で、予の家は幸に半潰であつた爲に壓死を免かれ、次には全く時の關係であつた。予が海嘯來と聞いて、假寓を逃れ出てから海嘯の襲來は凡そ五、六分後であつたらしい、又假寓より大佛までの逃走には長谷部落の最大建築であるM旅館の倒潰した上を踏み越へて來た。而して此方面の火事の元も此M旅館であつて、予等の通過して後、凡そ十分程で火が起つた。若し此の時に後れたならば唯

一の道路が火に遮られ、海嘯と火事との挾撃に逢ふのであつた。海嘯に先んずる五分、火事に先んずる十分運命は此間に懸けられたのであつた。あぶない處であつた。予は之を好き機運といふのである。かゝる好機運にめぐり合せなかつた人々として、向ふ三四軒と隣りて十数名の死者があつたのである。

◇ 以上は大震、海嘯、火災の三悪魔が一度に襲ひ懸つて来たに拘はらず、一命を拾ひ得た九月一日の予が遭難の實況で、之より後十數日間は、慢性的に恐怖、不安、苦艱、悲痛を實驗した。其無數の慘況のうち二三を記せば、

地震は鎌倉ではゆり返しなるものを感じなかつたが數時間は殆ど間斷なくゆれ續いた。

一日の晩は病院より分配された玄米の鹽むすびで飢を凌いだ、夕刻より冷氣を感じてきた、差當り單衣一枚では夜を明すことは六ヶ敷いと思つた。見ると避難者中荷物を澤山に持出して居る一族がある、予はゆくりなく其内の老女に話し掛けて見ると、N博士の老母であることが判つた。そこで無遠慮に着る物と足袋とを無心して、女の單物と跳足袋とを恵まれた。御

一二の例を言へば、一族の内病人の若い婦人があつた。臨月に近ひ妊娠の上に重い脚氣がありおまけに顔面に負傷をして居る。此一團は木の枝から枝へ蚊帳を張つて這入つて居た。すると此大雨だ。初めは蚊帳の天井に風呂敷杯を載せて居たが、何の効もなく、雨は瀧さばかりに病人を叩くので、家族の二三人は自身の體をのし掛けて雨の覆ひになつて居た。又二人の女中が三つばかりの負傷した小兒を預けられ、主人と離散して茲に避難中、小兒は程なく死んだ、そこへ此大雨である。二人の女は何のすべもなく、交る／＼屍體に傘をさし掛けて雨を凌いでゐた。其外類似の慘狀は澤山にあつた。

此中で午後四時頃突然人々によつて「海嘯が来た」と叫ばれ、大佛の主僧が先達で後ろの山に登り避けさせた。其混雑は言語の外であつた。跡で聞けば實は海嘯でなく〇〇〇〇の爲であつたのを、何人かの計略で海嘯と言つたのであつた。風聲鶴唳、危惧困惑、止る所を知らぬ有様であつた。

食物をはじめ物資の缺乏は言ふ迄もなく、初めの一二日は一握の食も口に入らぬ避難者が多かつた。予等の隣りに陣取つた三名の小供を伴れた若い母親があつ

陰で數日間の野天生活に風邪一つ引かなかつた。

一日の夜は大佛の庭前に近所の人々と一團になつて掛け茶やの椽臺を引出し、此上に横臥したが、臺にすれば二疊半位の處に九人寝た。予と女兒は辛く臺の上に乗ることが出来たが、妻と家婢は草の上である。夜の更けるにつれて初秋の月(舊曆七月二十一日)は煌々と明らかであるが、露の滋きこゝ雨の如くである、經木帽子を顔に乗せて、兎も角も少しまごろんだ。

二日から東京の被害がボツ／＼傳はつて、同方面から來る人があれば、避難者は忽ち寄つて來て情報を聞くのであるけれども、被害の大體が判るのみで、銘々が知らふとする事が判らない。

此日〇〇〇〇襲來の報が傳はり、人々は不安におそはれ、町の警備團が起り、殺氣が漲る。今夕より町役場から玄米握飯の配給が初まつた、早速下婢をして貰ひ受けしめて食した。

三日午後大雨襲來し、風を加へて頗る猛烈である。此日假にさし掛けた古トタン板の屋根がごんごん漏り横しぶきが吹き掛ける。予等は編籠傘で防禦に努めたが、矢張りびしょ濡れになつた。此雨は斷續して夜まで續いた。此時の避難者の實況は誠にみじめを極めた。

予等が病院から受けた乏しい握飯の一箇を頼つたとき、一人の小供が之を片手にさし揚げて踊り出した。又同處に七十許りの老夫婦が遭難以來二日間鹽氣を口にせぬとて、予等の食ひ餘りの澤庵一と片を乞ひ得て、あまた度叩頭感謝した。數日後予が寓居を訪れて來た某老夫婦の土産に蠟燭一本、又某より予の日常食膳に不可欠のオロシ料となる大根一本を恵まれた嬉しさは永く記憶から去らない。

予等第三日の夕大佛坂のブリキ職某氏の一室を借りて身を托し、漸く屋根の下に坐し且つ眠ることが出来た。病除の子が身體も災後一週間、元氣旺盛、何等の故障も覺へなかつた。思へば之も精神緊張の結果で、精神病者が食を絶つて尙ほ衰へない様なものであらふ。八日目より聊か微恙に罹つたが、平臥一週目で治つた、予は今次生來嘗て體驗なき不攝生の限りを盡したれば或は自身に大震に齊しい大變動が來はすまいかと内心心配してゐたが、僥倖にも應報が極めて輕少で済んだのは之も天佑である。

出來事はまた色々ある、予が肉體的苦痛の一つであつたのは、右の微恙静養中、宿では十二歳を頭に六人の子供が隣りの部屋で盛んに騒ぐのはまだ忍ばれたが

夜警團用の電燈千數箇を製造するとて、予が臥せる枕頭の仕事場で、終日ブリキ板を叩くのであつた、予は耳に栓塞を施して見たが、一向に驗めがない。神家の滅却心頭火亦涼」を熱心に提唱して見ても、解脱が中々出来なかつた。

東京では一と口に鎌倉全滅、死傷無算を傳へ、鎌倉では東京の大半を焼土化し、死者十數萬と聞へ、兩地の關係者は徒らに煩悶苦慮する許りで、交通杜絶、奈何ともすることが出来ずに數日を費した。予等も其數に漏れなかつたが、東京宅の子女や親戚が坐視に堪へずとて、女婿富田氏が従者一名と共に三日の朝決死の氣勢を以て、破壊された道路橋梁を踏み越へ、劍戟閃めき、死屍途に横はる暗黒無燈の夜を徹して徒歩鎌倉に向ひ、四日未明到着せられ、爰に初めて東京との連絡がとれ、相互一族の身邊無事なりし事と、他の詳細なる事情を知ることが出来た。

あの小さい鎌倉で倒壊家屋六千三百戸、死者五百人といふ事で、日を経るにつれて悲事慘況が益々判つて來た。予は汽車の交通完成を待つて九月二十六日といふに歸京した。

東京に歸つて驚いたのは聞きしにまさる被害の甚大

なると火災の爲めにさいなまれた慘況の深酷なことであつた。之に較ぶれば予が鎌倉で出逢つた酸苦は、遼東の冢で、人前で吹聴する程のものでない事を初めて知つた。

東京顯微鏡院は地震にはさしたる被害がなかつたのに、火災の爲めに一日午後四時頃に全焼した。富田副院長以下院員にて辛うじてイムメルジョン二臺と化學天秤一基を携へて上野に逃れ、野宿に夜を明して、翌日白金の宅に到達したそふである。

顯微鏡院は天明七年稻葉丹後守：春日局の良人：の別邸として造營せられた舊き建物で、幾度かの修繕改築を経て、其中心部は依然當時の骨格を遺し、廻り／＼て明治二十九年予の所有となり、大正四年改築の際、其棟裏より左記の棟札（棟上げの際の祭典神札）を發見し、江戸遺跡保存に趣味を有せらる、徳川頼倫侯の寶庫に寄贈した。

それで神田小川町一番地の新築顯微鏡院が占領した位置は、天明七年以降：本年大正十二年：まで百三十年間江戸幾度の火災にも犯されず、更に予が所有に歸して後、神田の大半を焼盡した兩度の大火事にも免れ

吐替加身依身多女
次良震異離坤兌見

稻葉丹後守越智宿禰正事住造之

奉祭玉女神尊前

五月、
日行、
神

武運長久家内安全啟

初之辰日辰之刻巳方水
天明丁未五月吉祥日

長崎忠治右衛門奉行之

櫻井多三右衛門原富永 棟 梁 之
平野五郎吉岡藤原尚道
明石大工三品藤 藤 重吉

得た珍奇の建物であつたが、今度といふ今度は、狂暴無比の祝融氏の魔手に罹つて最後を遂げて仕舞つた。

這次の震災災では幾多の人命の外、永世得難き國家の什寶をも無數に烏有に歸したので、我顯微鏡院の損失の如きは言ふに足らんが、予の身に取つては、三十年間の經營に獲た學問上の資産として、聊か愛惜に堪へないものがある。今此記の終りに於て、不換金の物體、二三に就て死兒の胎を算ふるの痴態を許されたい。

一、米と他の穀類の標本 百數十種
脚氣病原研究の材料として、内地は固より東洋各地、印度、米國産の米、又舊く貯へられた米（最舊きは七十餘年前のもの）其他穀類、印度産のカチアンイデオ、熟米等、之は顯微鏡院展覽の際二、三回公開

展覽せしめたことがある。

二、塵埃の標本 三十四種
内地の海外各地の諸種建物より採り集めた塵埃を平硝子瓶に納装せしもの。

三、顯微鏡的標本 千數百枚
中島一可ドクトル以來諸講師の製せられた生理的及病理的組織標本、日清戦後初めて日本に侵入した再歸熱が、九州博多で近藤常次郎學士から發見されたスピロヘータの歴史的標本、里見四郎氏の努力を以て臺灣で得られた各熱型、各時期のマラリア、ブラスモデウムの標本、宮本叔博士が渡歐の際蒐集された珍奇な寄生蟲の標本、前項の塵埃各種より製した標本、末の内には予が宗教上の迷信打破に利用すべく製した「糸引の名號」の標本などもあつた。

四、コッホ氏と同席の寫眞額一面

明治四十一年ローベルト、コッホ氏來朝の折り、北里、川上、小原、葛目及予が氏を周匝して撮影した記念寫眞であつた。原板の寫眞屋も今度焼失して仕舞つた。

五、予の油繪肖像畫額 一面

大正四年予が東京市衛生試驗所長退職の折、役所の有志諸君百餘名より記念として贈られた等身大の肖像で、安田稔畫伯の揮毫であつた。

六、雜誌 數千冊

内地發行の醫事衛生の各種雜誌で、此内には大日本私立衛生會雜誌、國家醫學會雜誌、東京醫學會雜誌等は第一號より完備してゐつた、又は古く發行されて現今は廢刊になつた珍しいものもあつた。(終)

抄 畧

◎可見「スペクトルム」ノ補體

ニ對スル作用

(Jour. Infect. Dis., 1922, 31, 356.)

エ ッ ク ル

紫外光線ガ補體ニ對シテ妨害的ニ作用スルモノナルヲハ多數學者ノ認ムル所ナリ、是等ノ研究ハ多ク血清ヲ直接紫外光線ニ曝スコトニヨツテ行ツタノデ、血清層ノ厚サヲ種々ニ變化サセテ見タノデアル。著者ニハコノ光線ノ補體及ビ双體ニ及ボス影響ニ就テノ研究ガ、ドウモ不満足ニ思ハレルノデ、コ、ニ記スル如キ研究ヲ行ツタノデアル。

可見「スペクトルム」ノ補體ノ上ニ及ボス影響ノ一ツハ補體作用ノ抑制デアル。即チ暗所ニ貯ヘタル血清ト同様ナル時間ニテハ、溶血反應ヲ起サズ、且ツ長時間光リニ曝ス時ハ補體作用ガ大ニ減ズル、爲ニ溶血反應ハ非常ニ遅クナリ、長ク光リニ曝シテ置クト、コノ影響モ長ク繼續スルニ至ルモノデアル。

赤色及ビ赤外線ハ補體ノ Activities (活動性) ニスル作

用ヲ遅カラシメ、「スペクトルム」ノ終リノ紫色線ニ近イ部分ノモノニ於テ抑制作用最モ顯著デアル、乾燥セル血清ハ光線ノ影響ニ對シテ抵抗ガ一層強ク、長時間曝ラスニ非ザレバ補體ノ作用ヲ弱メルコトハデキナイ、然ルニ稀釋セル血清ハ普通ノ血清ニ比シ、抵抗ガ一層弱イモノデアル。

六時間光線ニ曝ラシタ爲メニ起ツタ補體力ノ減少ハ光ニアテルコトヲ中止シタ後マデハ續カナイ、即チ其ノ作用ハ永續的ノモノデハナイノデアル、此ノ事實ハ既ニ Bowie and Brooks 並ニ Hubes 氏等ノ研究ニヨリ確メラレタ所デアル。

永ク曝ラスト補體能力ノ弱ルコトハ Landberg 氏モ指摘シテ居ル所デアル、光線ノ補體ニ及ボス作用ノ本體ニ就テハ猶ホ問題デアルガ、單ナル化學的變化ラシク思ハレル。Alain and Fisher ハ紫外光線ノ作用ハ一種ノ分子變化デアツテ、例ヘバ有毒ナル黃燐ガ無毒ナル赤燐ニ化スル如キモノダト云ツテ居ル。

コノ變化ハ吸着作用デハ起ラナイモノデアル。

Gore 氏多ク「プロテイン」(蛋白質)ハ「スペクトルム」ノ紫外線ノ所ニ吸收帶ヲ示スノデアルガ、「コロイド」ノ溶液モ亦タコノ現象ヲ明カニ示スノデアル。

コノ光線ノ影響ノ本體ガ何デアルカハ別トシテ、兎毛角モ補體作用ヲ抑制シ、之ヲ破壞スルコトハ事實ナノデアル。

Mc Coy, Hill and Schmidt 等ニヨツテ最近示サレタ所デアルガ、芳香性「アミノ」酸(amino-amid acid)族ヲ用フルト、コノ種光線ノ補體ニ及ボス作用ニ抵抗サセルコトガデキルト云フガ、要スルニ、コノ本體ノ説明ハ將來ニ殘サレタ問題デアル。

◎淋菌群ノ血清學的研究

(Jour. of Immunol., 1922, 7, 305.)

ト ー レ
バ ッ ク ル

淋菌ハ果シテ血清學的ニ區分シ得ルモノカ否ヲ決定セシガ爲メニ本研究ハ行ハレタ。
凝集反應ノ結果ニヨレバ、四十七株ノ淋菌ヲ八種ノ異ナレル血清ヲ以テ試驗シタ、其結果凝集反應ハ淋菌相互間ノ關係ヲ知ルニハ餘リ價値ナキモノナルコトガ明カトナツタ、次ニ吸收試驗ニハ七十七株ノ菌ヲ使用シテ居ル、先ヅ一種ノ免疫血清ヲ以テ、コノ七十七株ノ菌ヲ試驗シタ結果ヲ檢スルニ、吸收試驗ニヨツテ測定